

皮膚転移によって発見された腎細胞癌の1例

大阪労災病院泌尿器科 (部長 : 三好 進)
井上 均, 岡 大三, 高尾 徹也
月川 真, 水谷修太郎, 三好 進

A CASE OF RENAL CELL CARCINOMA FOUND
AFTER SKIN METASTASIS

Hitoshi INOUE, Daizo OKA, Tetsuya TAKAO,
Makoto TSUKIKAWA, Shutaro MIZUTANI and Susumu MIYOSHI
From the Department of Urology, Osaka Rosai Hospital

A case of renal cell carcinoma, found after skin metastasis is presented. A 76-year-old woman came to our hospital complaining of two painless subcutaneous tumors in her left chest. Histopathological diagnosis was clear cell carcinoma. She underwent left nephrectomy and histopathological findings revealed renal cell carcinoma, alveolar type, clear cell subtype, grade 1. Lung metastasis was proved soon after the operation. We removed skin metastasis several times after the nephrectomy.

(Acta Urol. Jpn. 43 : 723-726, 1997)

Key words : Renal cell carcinoma, Skin metastasis

緒 言

腎細胞癌のなかには早期に遠隔転移をきたすものもある。しかし、皮膚転移を契機に腎細胞癌が発見されることは比較的稀である。筆者らは皮膚転移によって発見された腎細胞癌の1例を経験したので若干の考察を加え報告する。

症 例

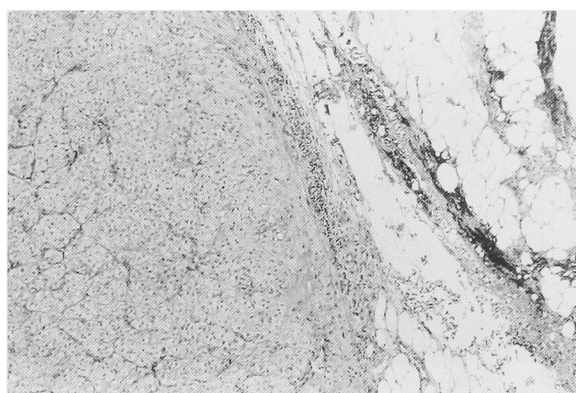
患者 : 76歳, 女性

既往歴 家族歴 : 特記すべきことなし

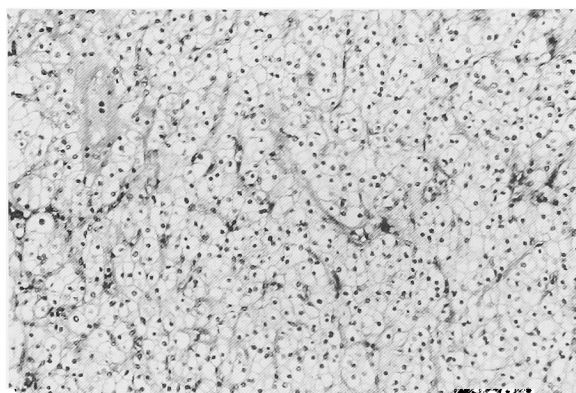
現病歴 : 1994年2月頃より左側胸部の2箇所の無痛性皮下腫瘍に気づいた。徐々に腫大してきたため5月10日当院外科受診。5月30日局所麻酔下にて最大径1.8 cm, 割面白色の易出血性の皮下腫瘍2個を摘出した。病理組織学的に淡明細胞癌であったため (Fig. 1A, B), 腎細胞癌の存在が疑われ当科紹介となった。経過中発熱, 肉眼的血尿, 疼痛といった症状はなかった。

現症 : 身長 154 cm, 体重 60 kg。腎を触知せず。表在リンパ節を触知せず。左側胸部に生検による手術痕あり。

検査成績 : RBC $362 \times 10^4/\text{mm}^3$, WBC $9,000/\text{mm}^3$, Hb 11.3 g/dl, Hct 34.5%, Plt $55 \times 10^4/\text{mm}^3$, 血液生化学はLDHが505 IU/l (190~450) と軽度上昇を示した以外に異常を認めず。CRP 陰性。検尿に異常を認めず。



A



B

Fig. 1. Histopathological examination showed clear cell carcinoma (HE stain A: $\times 40$, B: $\times 200$).

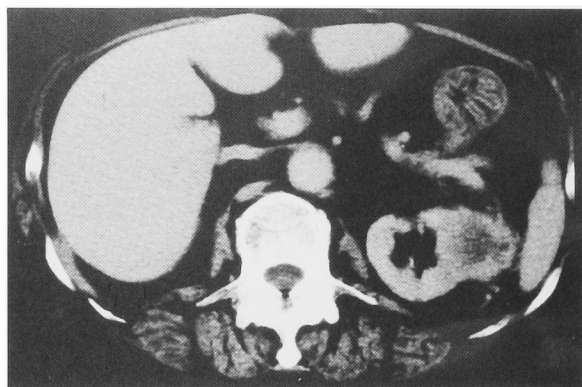


Fig. 2. CT appearance of left renal tumor.

画像検査：腹部造影 CT にて左腎上極に 5.5×3.2 cm 大の側方に突出し内部が不均一に造影される腫瘤像を認めた (Fig. 2). 左腎血管造影にて左腎上極に血管増生や腫瘍血管を伴う腫瘤を認めた。

以上より左腎細胞癌と診断し、左腎動脈より TAE 施行後1994年7月8日経腹膜的左腎摘除術およびリンパ節郭清術施行した。

摘出標本：重量は 360 g, 腫瘍の大きさは 4.5×4×3.5 cm であった。断面は灰白色で内部に一部出血壊死像がみられた。

病理組織学的所見：renal cell carcinoma, alveolar type, clear cell subtype, G1, INFα, pT2pN0M1 であった。

臨床経過：術後施行した胸部 CT にて両肺野に 5 mm 以下の転移巣を思わせる像をみとめた。このためインターフェロン療法開始したが、抑鬱症状出現したため10日目に中止、8月15日退院した。

その後も皮膚転移を繰り返し、1995年1月9日左上腕部皮下腫瘍、1月19日左側胸部皮下腫瘍、さらに7月7日に右背部皮下腫瘍を切除した。その後1996年2月9日左上腕、腋窩、右腰部皮下腫瘍切除、1997年2月7日には右上腕部の 70 mm 大、右肩の 50 mm 大、右背部の 50 mm 大、左背部の 20 mm 大の無痛性拍動性皮下腫瘍を切除し、いずれも病理組織学的に淡明細胞癌であった。一方、肺転移巣の増大は緩徐であり、現在その最大径は 13 mm である。

Table 1. Cases of RCC found after skin metastasis in Japan.

症例	報告者	年次	年齢	性別	皮膚転移部位	数	大きさ	他の転移	原発巣	治療	転帰
1	今井	1958	57	男	右上腕	1	鶏卵大	肺?	左	皮膚生検のみ	30カ月死亡 (剖検)
2	森田	1963	63	男	左側頭	1	25 mm	肺, 骨	右	皮膚生検のみ	6カ月死亡
3	本間	1963	55	男	右肩, 胸, 腹	20	大豆大	不 明	右	皮膚生検のみ	不 明
4	桐本	1965	60	男	顔面, 頭	2	不 明	骨?	不 明	皮膚生検のみ	5カ月死亡
5	斉藤	1967	62	男	不 明	不明	不 明	不 明	右	不 明	不 明
6	近	1968	48	男	左 背	1	不 明	肺?	左	皮膚生検 +血管造影	不 明
7	三好	1973	48	男	右側頭	1	20 mm	不 明	右	皮膚生検 +血管造影	死亡 (剖検)
8	野原	1974	48	男	右側頭	1	25 mm	不 明	右	皮膚生検のみ	死亡 (剖検)
9	尾口	1974	45	男	後 頭	1	11 mm	不 明	右	皮膚生検 +腎摘	不 明
10	増田	1977	59	男	左季肋	1	不 明	な し	右	皮膚生検 +腎摘	29カ月生存
11	友吉	1980	41	男	後 頭	1	不 明	骨	右	腎 摘	12カ月死亡
12	稲井	1986	67	男	左側腹	1	35 mm	な し	右	皮膚生検 +腎摘	34カ月生存
13	稲井	1986	71	女	左 肩	1	示指頭大	肺	右	皮膚生検+ 腎摘+IFN	14カ月死亡
14	藤井	1988	54	男	顔 面	1	不 明	不 明	左	皮膚生検 +腎摘	不 明
15	秋山	1988	71	男	右大腿, 背, 腋窩	3	不 明	不 明	左	腎 摘	死 亡
16	成田	1990	65	男	軀 幹	多数	鶏卵大	肺	右	皮膚生検+ 腎摘+IFN	4カ月死亡
17	桑満	1990	64	男	腹	1	くるみ大	な し	左	皮膚生検 +腎摘	不 明
18	皆見	1991	54	女	左大腿	1	13 mm	な し	右	皮膚生検	不 明
19	後藤	1991	53	男	右 肩	1	不 明	副 腎	左	皮膚生検+ 腎摘+IFN	不 明
20	梅田	1992	45	女	頭 部	1	9 mm	肺, 脳	左	皮膚生検 +腎摘	6カ月生存
21	浜本	1993	74	女	左側頭	1	不 明	な し	左	皮膚生検+ 腎摘+IFN	不明
22	自験例	1997	76	女	左側胸	2	18 mm	肺	左	皮膚生検+ 腎摘+IFN	36カ月生存

考 察

Brownstein¹⁾らは転移性皮膚癌724例を集計しているが、それによると男性482例のうち最も多かったのは肺癌(24%)で、次いで大腸癌、メラノーマ、口腔内癌、胃癌、腎細胞癌の順であり、女性242例では乳癌が69%と大半を占め、大腸癌、メラノーマ、卵巣癌、肺癌の順に多かった。本邦では高屋ら²⁾が、転移性皮膚癌219例を集計している。このうち男性は113例であり、胃癌42例(37%)、肺癌24例(21%)、膵臓癌9例(8%)、大腸癌9例(8%)、腎細胞癌5例(4%)の順であった。また、女性106例については、乳癌35例(33%)、胃癌23例(21%)、子宮癌16例(15%)、肺癌9例(8%)、卵巣癌5例(5%)、腎細胞癌4例(4%)の順であったとしており、いずれの報告でも腎細胞癌は上位に位置していた。

腎細胞癌における皮膚転移症例について岸田ら³⁾は本邦報告例62例を集計しており、このうち13例は皮膚転移が初発症状であったとしている。1986年稲井ら⁴⁾は皮膚転移によって発見された腎細胞癌の本邦報告例14例を集計しているが、これに8例を加えた22例について検討した(Table 1)。

年齢は41歳から76歳で平均58.3歳、本症例が最高齢であった。男女比は17:5で通常の腎細胞癌の男女比とはほぼ同じであった。皮膚転移巣は記載のあった21例中16例が単発であった。発生部位は頭部8例、腹部3例、四肢3例、肩3例であった。皮膚転移が頭皮に多い原因として只木ら⁵⁾は頭部では皮膚付属器を栄養する小血管が豊富で、皮下に軟組織が少ないという解剖学的特徴のためとしている。また皮膚転移によって発見された腎細胞癌症例のうち、他に転移を認めなかったものは記載のあった15例中5例のみであった。

原発巣の異型度について検討したところ、記載のあった5例全例がG1であったのが特徴的であった(症例12, 13, 17, 19, 22)。これは転移が先にみつかるような癌の病理学悪性度は高いであろうというわれわれの予想に反する結果であった。しかしこれらはいずれも比較的新しい症例に集中しており、初期の報告例(その多くは皮膚科からのものであった)では皮膚生検のみでは診断がつかず、血管造影検査や剖検で初めて腎細胞癌の存在が判明したものや診断後に全身状態が悪化し腎摘出術ができないまま早期に死亡した症例が目立った。これらの症例もはたして病理学的異型度がG1であったのかは疑問である。一方、Kouroupakisら⁶⁾は腎摘前に皮膚転移を認めた腎細胞癌6例について原発巣の細胞異型度はG2が4例、G3が2例であったとしており、1例の早期他因死を除く5例全例が36カ月以内に癌死したと報告している。他臓器転移は記載のある4例すべてに認められ、

G3であった2例はそれぞれ骨転移、リンパ節および肝転移があり、G2であった2例はそれぞれ肺転移、肺および骨転移があったとしている。これはわれわれの集計したG1の5例では肺のみ2例、副腎1例、転移なし2例であった事実と比較して、他臓器転移の背景が異なっている。皮膚転移によって発見された腎細胞癌の病理組織学的異型度については、今後の症例の蓄積による多数例の検討が待たれるところである。

一般に腎細胞癌の皮膚転移巣は境界明瞭な軟らかい半球状結節で拍動を有する⁵⁾とされているが、有痛性であるとする報告⁵⁾と無痛性であるとする報告^{4,7)}があり一定しない。今回われわれが集計した22例を検討したところ有痛性と記載のあったものは皆無であり、7例に無痛性または腫瘤に対する自覚症状がなかったと明記されていた。いずれにせよ確定診断は皮膚生検による病理学的検査にたよらざるを得ないのが現状である。

治療については、複数臓器転移を有する症例の予後は比較的不良であったが、転移が皮膚のみであったもので予後の記載のあった2例は各々29カ月、34カ月生存しており積極的な外科的治療が有効と思われた。本症例では肺転移を伴っていたがその増大はきわめて緩徐であり、皮膚転移を繰り返すものの肺以外の他臓器転移を認めることなく経過している特異な症例であった。初発の転移巣摘除後36カ月経過した現在も全身状態良好にて生存中であり、腎摘除術後の転移巣に対する積極的な手術が有効であったと考えられる。

結 語

皮膚転移によって発見された腎細胞癌の1例を報告した。

本論文の要旨は第155回日本泌尿器科学会関西地方会において発表した。

稿を終えるにあたり御指導を賜った恩師、大阪大学医学部泌尿器科学教室奥山明彦教授に深謝いたします。

文 献

- 1) Brownstein MH and Helwig EB: Patterns of cutaneous metastasis. Arch Dermatol **105**: 862-868, 1972
- 2) 高屋通子, 岡 恵子: 転移性皮膚癌. 西日皮 **40**: 649-656, 1978
- 3) 岸田 健, 原 芳紀, 北見一夫, ほか: 腎癌遅発性皮膚転移の1例. 泌尿器外科 **6**: 1067-1068, 1993
- 4) 稲井 徹, 滝川 浩, 淡河洋一: 皮膚転移によって発見された腎細胞癌の2例. 臨泌 **40**: 63-66, 1986
- 5) 只木行啓, 高橋正昭: 腎細胞癌の皮膚転移の1例. 臨皮 **41**: 403-405, 1987

- 6) Kouroupakis D, Patsea E, Sofras F, et al.: Renal cell carcinoma metastasis to the skin: a not so rare case? Br J Urol **75**: 583-585, 1995
- 7) 小野憲昭, 野田雅俊, 武田克治, ほか: 腎細胞癌

の皮膚転移の2例. 香川中病医誌 **10**: 60-63, 1991

(Received on May 21, 1997)
(Accepted on July 18, 1997)